地方社会における外国人住民の暮らしと仕事
――兵庫県豊岡市の事例から――

梅村麦生（神戸大学）

本報告では、日本の地方社会に暮らす外国人住民の現況と課題について、2019 年度と 2020 年度に兵庫県豊岡市と神戸大学の共同で実施した外国人住民調査の結果をもとに、特に彼・彼女らがどのような仕事に就いているのか、どのような職場で働いているのかに注目し、職場内外との関わりを含めて、検討する。

豊岡市は兵庫県但馬地方北部に位置し、2005 年の合併により今の規模となった但馬地方最大かつ山陰地方でも有数の人口を有する地方都市であるが、合併以前から同地域では人口減少が続き、国勢調査の結果によれば 2005 年の合併直後に 89,208 人だった人口は、2020 年に 77,489 人へと 1 割以上減少し、65 歳以上人口の割合を示す高齢化率も 2020 年時点で 34.3%と全国平均（28.6%）や兵庫県平均（29.3%）よりも高い割合を示すなど、人口減少や高齢化が目下より進んでいる地域である。しかしその一方で、この地域に暮らす外国人住民の数は年々増加してきた。豊岡市全体では 2005 年の合併時あるいはそれ以前から人口減少が続くなかで、外国人住民は 2010 年代前半の世界金融危機や東日本大震災を境として、主に製造業で雇用されていた中南米出身の日系人を中心に増減があったが、それ以降は一貫して増加を続け、2020 年には新型コロナウイルス感染症の流行にかかる入国制限の影響で一時的に減少したものの、入国制限の緩和後はふたたび増加に転じ、2022 年 7 月末時点では全住民 78,179 人に対して外国人住民 942 人（1.20%）となっている（以上の数字は豊岡市住民基本台帳データより）。その割合は、外国人が集住する各都市圏を含む全国平均（2.19%）や、阪神工業地帯を含む兵庫県平均（2.01%）には依然として及ばないものの（以上は 2022 年 1 月時点、総務省「住民基本台帳に基づく人口、人口動態及び世帯数調査」より）、かつてない数の外国人住民が豊岡市に暮らしている。

そして 2019 年度の調査結果で特に注目されるのは、外国人住民全体では技能実習を筆頭にいわゆる「活動に基づく在留資格」をもつ人の割合が高く、仕事を機に同市に移住した人がより多い一方で、国際結婚等を機に移住した外国人住民も、男女問わず当地で何らかの仕事に就いている人が大半を占めている、ということであった。働く先はさまざまな産業のさまざまな職種に及び、数としては技能実習が依然として最も多くを占めるものの、正社員・契約社員、さらには派遣社員・パートとさまざまな雇用形態で働いており、2020 年度以降は技能実習から特定技能への移行も始まっている。以前は結婚前や子育て後の女性が主な担い手だったり、高卒者を中心に雇用されていた業種や職種で人手不足が進み、外国人従業員の雇用に進んだというケースが少なくないが、その外国人従業員についても、技能実習から特定技能、あるいは非正規雇用から正規雇用への転換も見られる。そして特に後者では、同国出身の配偶者や子どもが家族滞在の資格で帯同し、さらに配偶者がパートとして同じ勤務先や他の職場で雇用されるケースもたびたび見られるようになっている。

このように各産業で人手不足がより深刻化し、さまざまな業種の事業所で働く外国人従業員がますます増え、多様化しているなかで、雇用する事業所の側の意識や対応にも変化が生じている。そうした外国人住民を取り巻く環境の変化を踏まえながら、地方社会における外国人住民とその暮らしの今後について、考える機会としたい。

文献

大久保元正・梅村麦生，2023（予定），「地方部の製造業と外国人労働者」徳田剛・二階堂裕子・魁生由美子編『地方発多文化共生のしくみづくり』晃洋書房.

佐々木祐・平井晶子編，2023（予定），『1%の隣人たち　地方的世界に生きる外国人住民――仕事・暮らし・子育て』昭和堂.

豊岡市，2020，『2019 年度　豊岡市・神戸大学共同研究「外国人住民に関する調査研究」報告書』，（2023 年 5 月 30 日最終閲覧，https://www.city.toyooka.lg.jp/_res/projects/default_project/_page_/001/011/099/houkokusho.pdf）

豊岡市，2021，『2020-2021 年度 豊岡市・神戸大学共同研究「外国人住民に関する調査研究」報告書』，（2023 年 5 月 30 日最終閲覧，https://www.city.toyooka.lg.jp/_res/projects/default_project/_page_/001/019/934/houkokusho.pdf）

（キーワード：地方社会、外国人住民、仕事）